

聖書日課 『からし種』 2023.5.21-5.28

<p>5月21日 (日) I 列王 10章</p>	<p>「あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように」(9節)。シェバの女王がソロモン王に拝謁に来た。交易を結ぶ相手を見定めるためである。ソロモンの知恵と富を目の当たりにした女王は「主なる神」をたたえた。女王は外国人であったが、ソロモンを王として立てている方がどなたであるかを知っていたのである。</p>
<p>22日 (月) I 列王 11章</p>	<p>「こうして主は、ソロモンに敵対する者としてエドム人ハダドを起こされた」(14節)。主なる神の二度の忠告(9節)に従わなかったソロモンは、多くの敵に悩まされる。その一人ハダドは、かつて將軍ヨアブに絶滅させられたエドム人の生き残りだった。憎悪の炎は世代を超えてくすぶり続ける。人間の憎悪の連鎖を断つことができるのは十字架の主の愛しかない。</p>
<p>23日 (火) I 列王 12章</p>	<p>「主は、かつてシロのアヒヤを通してネバトの子ヤロブアムに告げられた御言葉をこうして実現された」(15節)。ソロモンの子レハブアムは、主に尋ね求める祈りを父から学ぶことなく、取り巻きの若者の声に従った。私たちは耳触りの良いことに心を奪われて、厳しい忠告に耳を傾けることが出来ない。主の深い御旨を、謙虚に尋ね求める祈りを学んでいきたい。</p>
<p>24日 (水) I 列王 13章</p>	<p>「老預言者は息子たちに言った。『わたしが死んだら、神の人を葬った墓にわたしを葬り、あの人の骨のそばにわたしの骨を納めてくれ』」(31節)。この老預言者は何者なのだろう。「神の人」を欺いて死に至らしめておきながら、その人の骨の隣に自分を葬ってほしいと語るとは。この老預言者もまた神の言葉に従う厳しさとずっと格闘してきた一人なのだろうか。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.5.21-5.28

<p>25日 (木)</p> <p>I 列王 14章</p>	<p>「ヤロブアムが王であった期間は二十二年であった」(20節)。北王国最初の王ヤロブアムは、預言者アヒヤの言葉によって立てられながら、結局は主なる神に従いきれずに死んでいった。以後、北王国は「世襲」が成立せず、有力者が王位を狙い、謀反を繰り返す歴史を重ねていく。あらためて王とは何か、誰のために立てられた者なのかを考えさせられる。</p>
<p>26日 (金)</p> <p>I 列王 15章</p>	<p>「レハブアムとヤロブアムとの間には、その生涯を通じて戦いが絶えなかった」(6節)。北王国と南王国の王たちの間には「生涯を通じて戦いが絶えなかった」という言葉が三回も繰り返され、読んでいるうちに悲しくなる。私たちは「生涯を通じて」何をしていくのだろう。「主なる神と共に歩む」という告白を少しでも言いあらわせる「生涯」でありたいと願う。</p>
<p>27日 (土)</p> <p>I 列王 16章</p>	<p>「わたしはあなたを塵の中から引き上げて、わが民イスラエルの指導者としたが…わが民イスラエルに罪を犯させ、彼らの罪によってわたしを怒らせた」(2節)。これだけ罪を重ねて神を悲しませながら、イスラエルは神から「わが民」「わが民」と呼ばれていることに心が痛む。「わが子よ。今日も慈しみをもって呼びかけてくださる方に心を向けることが出来るように。</p>
<p>28日 (日)</p> <p>I 列王 17章</p>	<p>「女はエリヤに言った。『今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です』」(24節)。壺の粉も瓶の油もなくならず養われていても、息子の死と再生を通してしか、やもめは神の真実を知ることができなかった。「見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ 20:29)。見ないで信じる信仰を私たちに与えてください。</p>